

浅間一城の虹の輪（第6学年）研究計画

1 本研究で目指す子ども

この6月に示された学習指導要領解説では、物事の本質を探って見極めようとする一連の知的営みを、探究的な学習と定義し、横断的・総合的な学習を行うことを通して、よりよく課題を解決し、自己の生き方を考える子どもの姿を具現することを求めている。

ここでいう物事とは、子どもが向き合う探究課題のことであり、本質を探って見極めようとするとは、認識を更新することと解釈する。探究課題についての認識を更新することが本質に迫ることであり、深い学びを具現した姿であると考えられる。

そこで私は、**考えるための技法を用いて体験と体験をつなぐことを通して、探究課題についての認識を更新する子ども**を目指す。

これまでの総合学習では、専門家との協働的な取組が大切にされてきた。そこから多くの情報を獲得させ、探究課題についての認識を更新させるためである。しかし、繰り返し専門家とかかわり情報を獲得させても、子どもの認識が更新されず、表面的なところに留まり続けている姿が多く見られた。それは、子どもたちが、自分たちと専門家を、思いや願い、考え方などの目に見えない部分までつないでとらえることができていなかったことにあると考える。そして、ここに、教師の手立ての不足があると考えた。

本研究では、子どもたちの体験と専門家との協働的な体験を、考えるための技法を通してつないでとらえられるようにする。具体的には、双方の目に見える部分での共通点や相違点、また、目に見えない部分での共通点や相違点を、思考ツールを用いて比較・関連付けさせるのである。思いや願い、考えなどの目に見えない部分まで専門家とつながった子どもは、探究課題についての認識を更新し、課題をよりよく解決していく。

このような探究的な学習を経た子どもは、更新された探究課題についての認識に価値を実感し、自分と実社会や実生活を結び付けて考えるようになる。また、学習過程の中で繰り返し活用した考えるための技法についても、その価値を実感し、様々な学習場面で活用するようになる。

2 本研究で育成する資質・能力

①知識・技能	②思考力・判断力・表現力	③態度
○実社会・実生活における様々な課題の解決に活用可能な「探究課題に関する知識」	○探究課題の本質や価値に迫るために、整理した情報を比較したり関連付けたりする力	○自ら社会に関わり、参画しようとする態度

3 主張する働き掛け

環境に関する単元である。

子どもは、1サイクル目において、対象（川や海、潟など）と繰り返し体験的にかかわることを通して、豊かな自然環境の存在に気づき、対象の魅力を感じ始めた。そして、「その魅力を伝え、対象を将来にわたり残していきたい」という、持続可能な社会づくりにかかわる探究課題を設定した。さらに、子どもは、2サイクル目において再び対象と繰り返し体験的にかかわり、情報を整理分析することを通して、「対象は、豊かな自然環境と人々の生活が相互につながりあって形成されている」ことに気付いた。子どもは、これを、探究課題を解決するうえで大切な考え方であるとしてとらえ、伝えたいことの中核とすることにした。

前時では、これまで学んだことを、対象にかかわりのある方々に発表し、ある程度の満足感をもった状態である（C0）。

このような子どもに、次のように働き掛ける。

働き掛け1

アンケート結果を基に、自分たちの思いが、相手に100%伝わったと言えるかどうか問う。

子どもに、今のままの内容では思いが十分伝わらないと感じさせ、3サイクル目の課題を設定させる働き掛けである。

まず、アンケート結果を子どもに提示する。客観的に、自分たちの発表内容を振り返らせるためである。子どもは、自分たちの発表内容が概ね好意的に受け止められていることに満足感をもつ。しかし、自分たちの思いが十分伝わっていないという事実から、どうすれば100%になるのだろうかという課題意識をもつ。

働き掛け2

対象を将来にわたり残していくために取り組んでいる専門家と、自分たちの共通点、相違点を問う。

設定した3サイクル目の学習課題を解決するための探究の過程に見通しをもたせるための働き掛けである。

学習課題を設定した子どもに、専門家と自分たちの比較を促すためのフレームを示す（**ツール活用能力**）。比較させることで、自分たちに足りないことを気付かせるのである。子どもは、**人々の工夫や努力、思いや願いに着目し、課題の探究を通して自己の生き方を問い続ける「見方・考え方」**を働かせて、「専門家は、対象を将来にわたり残していくために、対象に直接かかっている。しかし、自分たちは、周りの人に呼びかけてはいるけれど、直接、対象にかかわろうとしていない」ということに気付く。そして、「私たちの思いを100%届けるには、私たちが対象と直接どようにかかわっていくのか考え行動することが大切だ」と、探究課題についての認識を更新する（**①知識・技能②思考・判断・表現③態度**）。この時、子どもたちは、比較するフレームを通じて、互いに意見を交わしながら専門家と自分たちの共通点や相違点を話し合う（**協働性**）。

働き掛け3

対象を将来にわたり残していくために自分がどのようにしてかかわっていけばよいか、視点を与えて問う。

自分と対象を結び付けて解決の見通しをもたせるための働き掛けである。

自分が対象とどのようにかかわっていけばよいか問う。その際に、自分の生活や行動、意識という視点を与える。具体的に想起しやすくするためである。子どもは、**人々の工夫や努力、思いや願いに着目したり、環境に関する持続可能な社会の構築に着目したりして、各教科等の「見方・考え方」**を働かせ、「地域の方の思いを受け止め、共に歩もうとする気持ちが大切だ。だから、対象のことを思って、ゴミを見かけたら拾うなど、できることに取り組めればよい」などと考える（**③態度**）。

働き掛け4

再度、発表の場を設け、参観者から評価を受ける場を設定する。

対象を将来にわたり残していくために、直接かかわってきた子どもに、上記のような場を設ける。探究的な学習を通して更新されてきた探究課題についての認識の価値を自覚させるとともに、自己の生き方を考えることを促すためである。

子どもは、多くの参観者から評価を受ける。更新された探究課題の認識について評価を受けた子どもは、**人々の工夫や努力、思いや願いに着目し、課題の探究を通して自己の生き方を問い続ける「見方・考え方」**を働かせ、自分が今後、どのように対象とかかわっていくのか考える（**①知識・技能③態度**）。こうして、**考える技法を用いて体験と体験をつなぐことを通して、探究課題についての認識を更新する子どもになる（Cn）**。

4 検証

(1) 検証すること

- ① 構想した働き掛けにより、想定したCnになったか。
- ② 構想した働き掛けにより、想定した「見方・考え方」を働かせることができたか。
- ③ 構想した働き掛けにより、想定した資質・能力を発揮することができたか。

(2) 検証の方法

- ① 働き掛け3・4を受けて、探究的な「見方・考え方」を働かせ、探究課題についての認識を更新させ、その価値を実感したかどうか、ワークシートの記述から検証する。
- ② 働き掛け1から、探究的な「見方・考え方」を働かせているかを、発言や学習活動の様子、ワークシートから検証する。
- ③ 働き掛け1から、想定した資質・能力を発揮しているかどうかを、発言や学習活動の様子、ワークシートの記述などから検証する。

5 年間の授業計画

- (1) 指定研究授業 (6月)「にいがた未来ビジョン～鳥屋野潟を新潟の未来へ～」(16時間)
- (2) 中間検討会 (9月)「にいがた未来ビジョン～鳥屋野潟を新潟の未来へ～」(14時間)
- (3) 初等教育研究会 (2月)「にいがた未来ビジョン～つくりたい！わたしたちの新潟」(25時間)